

朝倉氏

朝倉氏（あさくらし）は、但馬国を拠点とした豪族。越前国を拠点とし、後に発展して戦国大名となった越前朝倉氏が有名。藤原氏流等の朝倉氏もあるとされるが、別項にて扱う。



三つ盛木瓜

概要

但馬には、開化天皇の後裔^[1]とも孝徳天皇の後裔^[2]とも伝わる日下部氏（くさかべし）が、平安時代から大武士団を形成し栄えていた。朝倉氏は、この日下部氏の流れをくむ氏族のひとつである。

朝倉氏の本貫は但馬国養父郡朝倉（兵庫県養父市八鹿町朝倉）である。但馬朝倉氏から分かれ越前に移った系統が越前朝倉氏である。

日下部氏の流れをくむ氏族は他に、山陰最大の守護大名・山名氏の家老職である太田垣氏・八木氏・田公氏などがある。とくに太田垣氏・八木氏は山名氏の分国の守護代を勤めて山陰道・山陽道で栄えた。

但馬朝倉氏

平安時代末期に日下部宗高が但馬国養父郡朝倉に住し、はじめて朝倉氏を称したとされる。

伝説では、宗高の子・朝倉高清は平家に与したことで鎌倉時代に領地を没収されたが、関東で誰も退治できなかった白猪を射て退治した功績により、源頼朝より領地の安堵と木瓜紋を賜ったとされる。その後、朝倉氏は朝倉城を築き、代々この城に拠った。通し字は「高」。

高清の長男・安高は八木氏を興し、次男の信高が朝倉氏を継いだ。承久の乱で信高は敗れた京方に付いたため朝倉氏は衰退した。このため八木安高の孫・高実が朝倉氏を継いだ。

室町時代には但馬守護の山名氏に仕えたが、戦国時代に織田信長に敗れた。

越前朝倉氏

越前朝倉氏は、南北朝時代に越前国守護・斯波氏に仕えた朝倉広景から始まる。越前朝倉氏は甲斐氏、織田氏に次ぐ斯波三守護代の第三席となり、のちに守護代三家で斯波氏領国三国を分けることになる。後に朝倉氏自体が守護に任命されるようになった。通し字は「景」。

室町時代には朝倉孝景（英林孝景）が守護代甲斐常治とともに主である斯波義敏と対立し、足利將軍家の家督争いなどから発展した応仁の乱では山名宗全率いる西軍から細川勝元率いる東軍に属し、越前から甲斐氏を追う。朝倉孝景は越前国守護に取り立てられ一乗谷城に拠った。孝景は分国法である『朝倉敏景十七ヶ条』を制定した。

旧主の斯波義敏が越前守護職を回復せんと、朝倉氏の越前実効支配について幕府に異議を申し立てると、かつての守護斯波義廉の子を鞍谷公方（足利義持の弟、足利義嗣の子・嗣俊を祖とする。室町將軍家の越前における分家、鞍谷御所と呼ばれて尊崇を集めていた。）の養子として足利義俊と名乗らせた上で、幕府の反対を押し切ってこの義俊を“名目上の越前国主”として擁立し越前守護の斯波氏に対抗した。のちに朝倉氏自体が越前守護に任じられることとなったため、鞍谷公方足利氏は朝倉氏の客将と化し、朝倉氏が名実ともに同国の大名となった。戦国時代には越前支配のみならず、隣国若狭、近江にも進攻し、領土を広げたが、尾張国の織田信長と対立し、1573年（天正元年）、戦国大名としての勢力を失った。

越前朝倉氏の一族とされる朝倉在重が徳川家に仕え、子の宣正は徳川忠長の附家老・掛川城主になるが、忠長の改易に連座して宣正も改易となった。宣正の弟の家は江戸幕府旗本として存続した。

系譜

開化天皇 — 彦坐王 — 船穗足尼 — 豊忍別乃君 — 島根尼君 — 太尼牟古乃君 - - - 日下部表米 — 荒嶋 - - - 利実 — 用樹 — 蕃在 — 親泰 — 広佐 — 佐晴 — 朝倉宗高 — 朝倉高清 — 八木安高 — 八木高吉 — 朝倉高実 — 朝倉高景 — 朝倉高資 — 朝倉広信 — 朝倉広景 — 朝倉高景 — 朝倉氏景 — 朝倉貞景 — 朝倉教景 — 朝倉家景 — 朝倉孝景 — 朝倉氏景 — 朝倉貞景 — 朝倉孝景 — 朝倉義景

越前朝倉氏歴代当主

- 朝倉広景【一】
- 朝倉高景【二】
- 朝倉氏景【三】（大功宗勳）
- 朝倉貞景【四】（大心宗忠）
- 朝倉教景【五】（心月宗覚）
- 朝倉家景【六】
- 朝倉孝景【七】（英林孝景）
- 朝倉氏景【八】
- 朝倉貞景【九】
- 朝倉孝景【十】（宗淳孝景）
- 朝倉義景【十一】

越前朝倉氏系図

（不明な点も多く諸説あり）

開化天皇

:

日下部佐晴

|

朝倉宗高

|

高清

|-----|

広信

八木安高

|

|

広景₁

八木氏へ

|

高景₂

|

氏景₃

|

貞景₄

|-----|

-----|

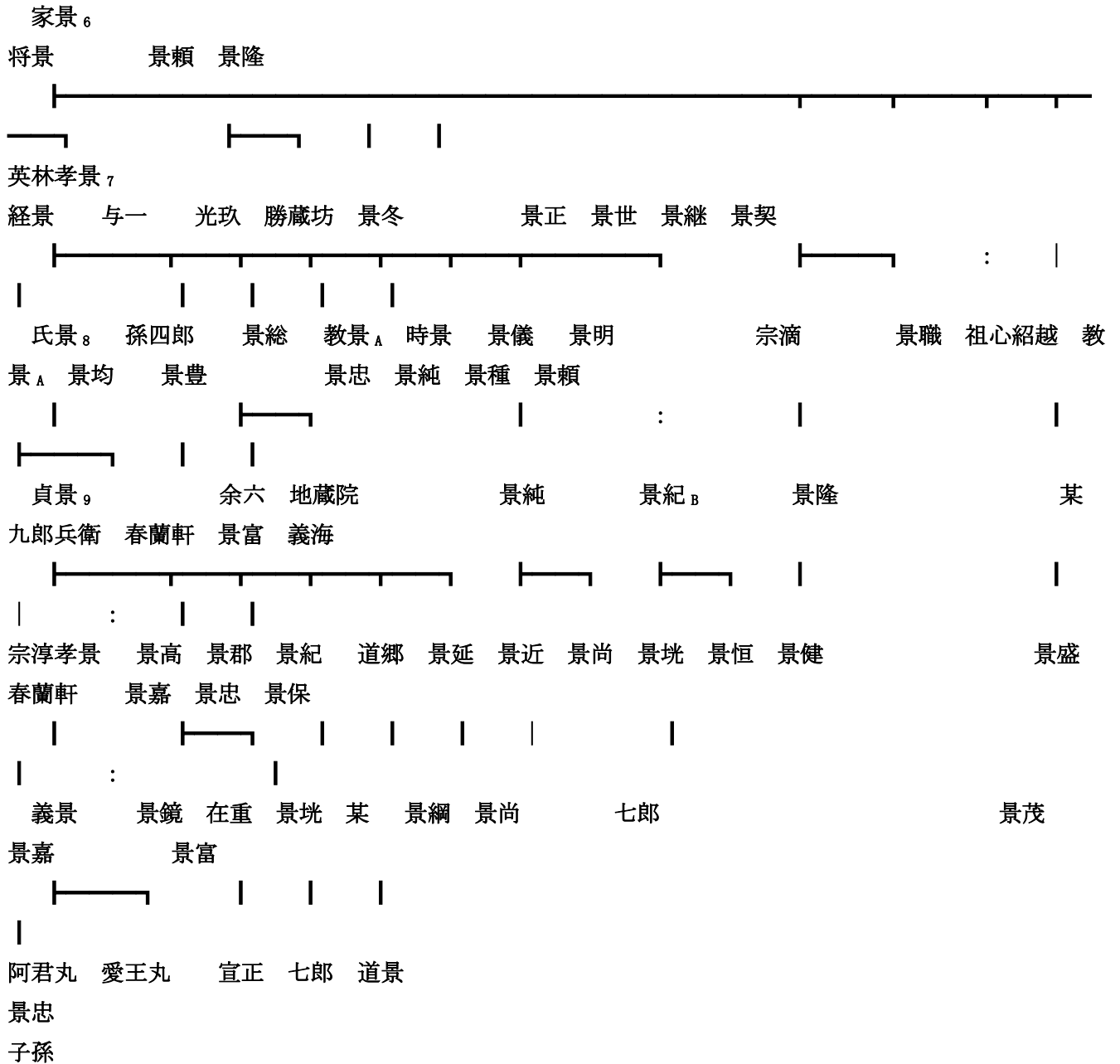
教景₅

頼景

|-----|

-----|

|-----|



小田原の後北条氏家臣、または伊勢や遠江にも“朝倉氏”がおり、越前朝倉氏との系図上の関係は資料に乏しい。小田原の朝倉氏は越前との関連がある、と伝わり、遠江に関しては旧主である斯波氏が守護を務めていたこともあり、ライバルであった甲斐氏同様に、同国にも一族が分かれている可能性はある。伊勢の朝倉氏も早期の分家と伝わり、家紋の同一性も見る事ができる。ともあれ、広義の“朝倉一族”ではなく“戦国大名越前朝倉氏”の子孫伝承を考える場合には、これらの朝倉氏との誤認・自称などが考えられることに留意したい。

- 越前朝倉氏滅亡後、越後国に朝倉愛王丸が落ち延びたという伝承が、また、出羽などにも子孫伝承が残るが、真偽は不明。
- 日本海側各所に一向宗と結びついた「朝倉末裔伝説」がパターン流布している。
- 渥美半島にも末裔伝説が残る。伊勢から渡ったとされている。
- 越後国の上杉謙信を頼り、朝倉家再興を果たそうとした朝倉景嘉がいるが、謙信の死により頓挫した。以降の動向は不明。
- 備後の鞆にいた足利義昭（実質的には毛利氏）を頼り朝倉家を再興しようと奔走した朝倉宮増丸、及び家督後継者と擬せられていた朝倉景忠がいるが、毛利氏と織田氏（織田信長）の中国戦線の激化などの影響により、不成功に終わった。以降の動向は不明。

- 江戸時代初期に、朝倉義景の子と伝わる信景が、江戸に本願寺派の一寺「朝倉山一乗院遍立寺」を開き、住職として生涯を全うしている。系図上は不明だが、朝倉氏の縁戚の本願寺と縁を持ち、江戸幕府の足元にて実在したらしい人物である。
- 英林孝景の次男・秀景の孫と称する朝倉政元は、後北条氏、豊臣秀次、徳川家康、徳川頼宣、徳川頼房と仕えた。政元の子・政明は徳川秀忠に仕え、500石の旗本として存続した。
- 徳川家康家臣→家光弟で駿河藩主徳川忠長の附家老→同家改易後、古河藩士井氏預かり→同藩家臣、と続いた朝倉氏（朝倉宣正系）がいる。朝倉景鏡の甥とされるが、父親の動向等に不明な点が多く、越前朝倉氏との関連は確定ではない（北条家臣、もしくは伊勢、遠江の朝倉氏等の系統か？今川氏との関連など、朝倉在重の項目参照。）。
- 江戸時代初期に武蔵国稲城の長沼村と大丸村を領した旗本に朝倉豊明がいるが、越前朝倉との関連など、どの系統に属するのかは不明。
- 土佐に早期に分かれた分家（朝倉友景系）と称する朝倉氏が残る。
- 早期に分家した一族と考えられている溝江氏が、豊臣秀吉に馬廻として仕え、のち1万石で旧領復帰。関ヶ原にて西軍に所属して改易となる。その後、浪人したのち、子孫は彦根藩士として存続した。
- 水戸藩には、朝倉時景-之景系と称する後北条氏家臣の朝倉氏が藩士として存続した。子孫の伝承によれば、備前に移住した系統と、水戸藩士になった系統がある、と伝わり、幕末水戸藩の水戸天狗党の乱に参加した朝倉源太郎（朝倉景行）は同系統の子孫と称する^[3]。また、源太郎の弟の朝倉三四郎（景敏）は元治元年(1864年)江戸から松平頼徳に随い、各地を転戦。西上軍にも加わり、慶応元年(1865年)2月23日、越前敦賀にて斬首となった。享年19。従五位を贈位され靖国神社に合祀された^[4]。
- 薩摩藩にも朝倉氏がいる。系統は不明だが、御側用人を務めた「朝倉孫十郎景矩」の名乗りなど、越前朝倉氏との関係も考えられる。徳川13代将軍御台所天璋院に仕えた老女幾島はこの家の出身と考えられる。「朝倉孫十郎」は朝倉貞景の子の朝倉景延の名乗りでもあり、「孫（数字）郎」は越前朝倉氏の名乗りとして例が多い。

Wikipediaによる